

言外の意味のコミュニケーション：語用論概説

Unsaid or Nonliteral Communication: An Introduction to Pragmatics

内海 彰
Akira Utsumi

電気通信大学電気通信学部システム工学科
Department of Systems Engineering, The University of Electro-Communications
utsumi@se.uec.ac.jp, <http://www.utm.se.uec.ac.jp/~utsumi/>

keywords: pragmatics, said-implicated distinction, literal-nonliteral distinction, Grice's conversational implicature, Sperber&Wilson's relevance theory, inference, politeness, metaphor, irony

1. はじめに

ことばを用いたコミュニケーションでは、ことばによって伝達される情報がことばに内在する意味(言内の意味)に含まれない場合が少なくない。例えば、誰かの部屋に入ったときに(1)を発話した状況を考えてみよう。

(1) ここ、ちょっと寒いね。

この発話によって「発話者が今入った部屋が寒い」という言語表現から素直に導かれる情報は伝えられるのはもちろんのこと、それ以上に「暖房をつけてほしい」とか「おれが来る前に部屋を暖かくしておかないなんてけしからん」といった情報も同時に伝えることができる。これらの情報は言語表現だけをいくら詳細に解析しても得られそうにない言外の意味である。

しかしながら、(1)がありとあらゆることを伝達できるわけでもない。例えば、この文が「2050年には人間と同程度の知能を持つロボットが出現するであろう」という情報を伝えられるかどうかを考えてみるとよい。

ここで素朴な疑問が生じる。いったい伝えられる意味と伝えられない意味の違いはどこにあるのか。どのようにして我々はことばに内在しない言外の意味を導き出すのであろうか。なぜ我々はこのような不確実なコミュニケーションを行うのであろうか。

これらの疑問に答えようとする研究分野を語用論という。語用論はもともと Grice, Searle らの言語哲学研究を発端に言語学の中で分野が形成されてきたが、最近では言語学の範疇を超えて、認知科学、心理学、社会学、人類学等の周辺分野とともに総合的な言語科学として発展している [高原 02]。そこには AI 研究者にとっても魅力的で示唆に富むアイデアや知見が含まれているはずである。

そこで本稿では、このような周辺分野を含めた言外の意味のコミュニケーションの学としての語用論について概説する。以下では、言外の意味とは何かを論じた後に、そのコミュニケーションのメカニズムについて述べる。最後に言外の意味を持つ代表的な表現としてのメタファーとアイロニーについて紹介する。

2. 言外の意味とは何か

まずは、語用論一般に関するいくつかの文献で、言外の意味について記述されている部分を抜き出してみよう。

- 文を構成する語の意味が集積統合されたものを「言内の意味」とし、この文が発せられる状況において、伝達手段として、この文が果たしている機能の内容を「言外の意味」と名づける [小泉 90, p.6]
- 「言外の意味」とは、明言されていないにもかかわらず、プラスとして伝えられる意味を指す。 [小泉 01, p.35]

このような記述は言外の意味の一般的な説明として用いられるが、実は、言内の意味以外の意味であるということしか述べていない。では言内の意味とは何かということになるが、上記の記述では「文を構成する語の意味が集積統合されたもの」とか「明言されている意味」といったあいまいな説明になっている。これでは、例えば(1)の言内の意味には「ここ」の指示先も含まれるのか、「ちょっと寒い」によって表現される温度範囲は特定されているのか、などといった細かい区別はわからない。もちろん明確な区別などできないという立場もあろう。しかし、言内の意味と言外の意味の間にいくらかの幅を持った境界線を定めることは可能であると考えられる。

実は、言内と言外の意味の間の境界線をどこに引くかは、語用論のひとつの大きな研究課題となっている [Ariel 02, Levinson 00]。これらの研究では、以下の2つの視点から言外の意味にアプローチしている。

明示性による区別 明示された・言われている意味 (what is said) と暗示された・推意されている意味 (what is implicated) との区別を考える。

字義性による区別 文字通りの・字義的な意味 (literal meaning) と非字義的な意味 (nonliteral meaning) との区別を考える。

これらの視点の違いもそれほど明確ではないが、おおよそのところ、明示性の視点からは文の表す意味(文意)と話し手の意図する意味の違いが議論されるのに対し、

字義性の視点からは文の個々のことばから合成される意味とそれ以外の意味の違いが議論される。例えば以下のイディオム文 (2a) は、(2b) と (2c) という 2 つの両立しない文意を持つ。

- (2) a. He kicked the bucket.
 b. 彼がバケツを蹴った。
 c. 彼がくたばった。

字義性の視点では、(2b) が文字通りの意味で (2c) が非字義的な意味と考える。一方、明示性の視点では、両者とも明示された意味であり、これらの意味から派生して得られる意味(例えば「彼がくたばって嬉しい」)を暗示された意味と考える。

2・1 明示性による区別

言われている意味と推意されている意味の区別について初めて論じたのは、Grice[Grice 89]である。Grice は以下の処理によって得られる、真偽を判定できる最小限の命題 (minimal proposition) が言われている意味であり、それ以外に得られる意味を推意 (implicature) であるとする。

- コード化された意味の解読
- 多義の解消 (一義化)
- 照応表現の指示先の付与

これによると、文 (1) の明示的な意味は「部屋 X はちょっと寒い」ということになる。さらに Grice は、推意の中でも特に非慣習的でかつ会話の文脈より導かれる会話の推意に着目し、これを合理的に導出するメカニズムについて論じている (これについては 3・1 節で後述する。)

これに対して、さらに以下の拡充処理を経た意味を明示的な意味としたのが Sperber&Wilson の関連性理論 [Sperber 95] である*1。彼らはこの明示的な意味を表意 (explicature) と呼んで、推意と明確に区別する。

- 拡充 (enrichment): 語彙にコード化された意味を緩めたり、狭めたりする操作

例えば、文 (1) の「ちょっと寒い」の温度範囲を特定する (状況によって異なるが、例えば秋から冬へ移り変わる頃では 15 度前後) のは拡充の例である。また、以下の文 (3) では「子供」という語を本来の意味を緩めて「わがままで自己中心的な人」という意味で用いているが、これも拡充の例である*2。

- (3) (大人に向かって) あいつは子供だ。

さらに、文から得られる表意を埋め込んだ形の高次命題 (例えば「発話者が部屋 X はちょっと寒いと思っている」) も表意であるとする。

以上の明示的な意味の二つの考え方の違いがよく分かる例として、‘and’ によって接続される文の意味がある。

多くの場合、言語で用いられる ‘and’ は、論理学における連言以上の意味 (時間的な順序や因果関係) を伝達する。例えば、文 (4) の通常の読みは「結婚した後に子供ができた」という時間的な順序を反映している。

- (4) They got married and had a child.

Grice はそもそもこのような派生的な意味を扱うために会話の推意という概念を導入したが、Sperber&Wilson はこの派生的な意味を表意 (言内の意味) と考える。その根拠として、彼らはこのような派生的な意味を考えなければ文の真理条件的意味が規定できない例が多くあることを挙げている [Carston 02]。

- (5) It's better to do your PhD and get a job than to get a job and do your PhD.

もし文 (5) の言内の意味に時間的な順序を含めなければ、この文は “It is better to p than p” となり、意味を成さなくなってしまうのである。

2・2 字義性による区別

Gibbs は、多くの研究における字義性の定義をまとめると、以下の 5 つの基準に分類できるとする [Gibbs 94]。

- 慣習性による定義: 日常的に用いられる表現であるか
- 主題による定義: ある特定の話題を語るのに普通に用いられる表現であるか
- 非比喩性による定義: ある概念を次元の異なる別の概念で表現していないか
- 真偽条件による定義: 言語表現が実在するものを指示するために用いられ、真偽を判断できるかどうか
- 文脈依存性による定義: 文脈のない状況 (ゼロ文脈) において得られる意味であるか

これらのうちのどの基準を用いるかは、場面や状況などに依存して決定され、それに応じてどの意味が字義的かが変化する。例えば、文 (1) の「暖房をつけてほしい」という意味は暖房をつけてほしいことを伝達するとき用いる通常表現ではないので、主題による定義では非字義的な意味と解釈される。しかし非比喩性による定義では、暖房を寒さという関連のある概念で述べているので、より字義的に近い意味になる。一方、メタファー (3) ではこれと逆になる。この文はわがままで自己中心的な大人を表すのによく用いられる表現なので、主題による定義では字義的と考えられるが、非比喩性による定義では明らかに非字義的である。

3. 言外の意味はどのように伝達・理解されるか

3・1 言外の意味をどのように導くか

言外の意味の導出を考える上でキーとなる概念に、推論 (モデル) がある [Akmajian 01, Sperber 95]。コミュニケーションにおける推論モデルでは、原則や方略といった一種のデフォルトルール (選好) を用いて、コード化された意味と文脈情報から言外の意味を推測すると考え

*1 文献 [Levinson 00] には、Grice や Sperber&Wilson を含む多くの研究者による言われている意味と推意されている意味の区別の違いがまとめられている。

*2 最新の関連性理論では、このような場合をアドホック概念形成として、拡充とは区別している [Carston 02, 東森 02]。

表 1 グライスの協調の原則と 4 つの格率

協調の原則	話し手と聞き手は、言語伝達において互いに協調すべきである。
質の格率	偽と信じていること、根拠のないことを言うな。
量の格率	要求されているだけの情報量を含めよ。
関係の格率	関係のあることを言え。
様態の格率	不明瞭、曖昧さを避け、簡潔に順序立てて述べよ。

る。推測であるので、当然間違えることもあるし、得られた言外の意味が後で取り消されることもある。あくまでも導かれる意味をゆるやかに保証するという程度のものである。

言外の意味の導出に関するこのような見方は、Grice以前の言語学でコミュニケーションのモデルとして用いられていたコードモデル(Shannon-Weaverモデル)の前提となる、記号(言語表現や文脈)とメッセージ(伝達される意味)を一意に結び付けるコード表の存在を必要としない。このようなコード表の存在を仮定すること自体に無理があるが、存在するとしてもこのような知識を話し手と聞き手の間で共有することは不可能である。

なおここで注意しておきたいのは、言外の意味は推論のみでしか得られないが、言内の意味(表意)の導出にもこのような推論が関わっているという点である。多義の解消では文脈から適切なものを推論を用いて選択するし、拡充はことばにコード化された意味を拡張する点で純粋に語用論的な推論にもとづいている[Sperber 95]。

§1 Griceの会話の推意理論

Griceは表1に示す協調の原則やその下位原則である会話の格率に矛盾しないような解釈を行えば会話の推意を推論できると論じた[Grice 89]。例えば、以下の発話(7)からどのように推意(8b)が導かれるかを考えてみよう。

- (6) A: 今夜、飲みに行くかい?
 (7) B: これから会議があるんだ。
 (8) a. Bはこれから会議に出席する。
 b. BはAと一緒に飲みに行けない。

まず発話(7)の言内の意味(8a)だけでは、Aの誘いに対する返答としては関連性に欠けている。つまり表1の関係の格率に違反していることになる。しかしBが関係の格率を守っていないと考えるべき理由もない。そこでBが(8b)を伝達していると考えれば、Bは関係の格率を遵守することになる。さらにBはAが(8b)のように解釈することを特に阻止していない。よって、Bは発話(7)が(8b)と解釈されることを意図しており、(7)とすることで(8b)を推意したのである。

同様の説明は発話(1)にも適用できるし、メタファー(3)は質の格率に表面上違反する(「あいつ」は文字通りの意味で子供ではない)ので、それを遵守すると考えることによって比喩的な意味が導かれる。つまりこれらの表現に共通するのは、協調の原則や格率を故意に破り、それを逆用することによって推意を相手に伝達するということである。

さらに、上記のように格率に違反していなくても、格率を単に守っていることから導かれる推意もある。例えば前述のand結合の例(4)では、様態の格率(順序立てて述べよ)に従うと考えることによって、「結婚した後に子供ができた」という推意が得られる。(なおGriceは‘and’の派生的な意味を推意と考えていたことに注意。)

§2 Sperber&Wilsonの関連性理論

Griceの協調の原則や格率は適切なコミュニケーションを行うための規範(デフォルトルール)であり、それが守られていると仮定することによって推意が得られると述べた。一方、Sperber&Wilsonの関連性理論[Sperber 95]では、コミュニケーションのメカニズムそのものが以下に述べる関連性の伝達原則に従っており、推意の導出はそこから得られる必然的な結果であると考えられる。

関連性の伝達原則は、「すべての意図明示的伝達行為(コミュニケーション)は、その発話が聞き手がそれを処理する労力に見合うだけの十分な関連性を持つことを伝達する」というものである。この原則によって、発話が聞き手にとって関連性を持つことが保証され、発話理解は聞き手にとって最適な関連性を達成する解釈を探す過程と捉えられる。なお、ここでいう意図明示的コミュニケーションとは、何かを知らせたいこと(情報意図)を聞き手に公然と知らせる(伝達意図)発話を用いたコミュニケーションのことである。

関連性理論では関連性を「コストと報酬のバランス」と考える。最小のコストで最大の報酬が得られるような発話は最適な関連性を持つ。ここでいう報酬とは、聞き手が持つ情報と発話内容を組み合わせることによって新しい情報を得ることである(これを認知効果という)。一方、コストとは発話処理(聞き手の持つ情報へのアクセスや新たな情報の導出)に必要な労力のことである。

以上の枠組みにより、推意の導出は以下のように行われる。前述した例(7)を再び考えてみよう。

- (8) c. 会議に出席する人はAと飲みに行けない。
 d. 会議に出席する人は真面目である。
 e. Bは真面目である。

推意(8b)を導くためには、(8c)という情報が必要である。(8c)は文脈(6)において聞き手が容易にアクセスできる情報なので処理労力は少ない。かつ(8a)と(8c)から新たな情報(8b)を得ることができる。一方、(8d)という想定も考えられるが、これは文脈(6)において(8c)よりも容易にアクセスできず、さらにこれから新たに得られる情報(8e)も(8b)ほどの認知効果を達成できない*3。よって推意(8b)を導くほうが高い関連性が達成される

*3 例えば、AとBと一緒に飲みに行くほどの親しい仲ならば、AはBが真面目なことをすでに知っていると考えられるので、推意(8e)を得ることによる認知効果は小さい。逆に、Bがいつも会議をさぼっていることをAが知っているとする、推意(8e)によって大きな認知効果が得られることになる。この場合には、Bの発話(7)に対し、Aは例えば「へー、そんなに真面目だったっけ」と応答するかもしれない。いずれにせよ、関連性の伝達原則に従った解釈が行われていることになる。

し、それに続けて別の推意 (8e) を導くことは全体として関連性を下げることにもつなげてしまう。従って、発話 (7) から推意 (8b) のみが導出されることになる*4。

§ 3 語用論的推論能力と読心能力

推意を導出するためには語用論的推論が必要であると述べてきたが、ではいったいこの推論過程は人間の心の中の認知過程とどのように関係するのであるか。

Sperber&Wilson は、このような語用論的推論能力は読心 (mind-reading) 能力の一部であると主張している [Sperber 02]*5。読心能力とは他人の振る舞いをもとにその人の心を読む (その人に心的状態を帰属させる) 能力のことであり、心の理論 (theory of mind) を持つともいう。例えば、人が微笑んでいるのを見ると、我々はその人が happy だと推測する。これは、微笑みという振る舞いをもとに、happy という心的状態をその人に帰属させることである。Sperber&Wilson の主張は、推意の導出もこれと同じことをやっているということである。つまり発話という他人の振る舞いからその人が伝達したい推意 (または表意) を推測し、それを発話者の意図として考えるのである*6。

Sperber&Wilson はこの 2 つの能力を関係づける証拠をいくつか挙げている。例えば、読心能力の障害があるとされる自閉症者のコミュニケーション能力は健常者より劣っている。照応理解に難を示し、ことばを文字通りの意味に解釈しすぎて、例えばアイロニーを適切に理解することができない [Baron-Cohen 95, Happé 93]。また健常者の読心能力の発達とコミュニケーション能力の発達にも類似した傾向が見られる。

3.2 言内の意味はどのように関与するか

3.1 節では言外の意味がどのように導出されるかについて論じてきた。ではいったい言内の意味はそこでどのような役割を果たすのであろうか。

§ 1 言内の意味と言外の意味の処理過程の違い

心理言語学の分野では、非字義的な意味の理解において、字義的な意味がどのような段階で (または順番で) 処理されるのかを実験的に調べることによって、上記の問題に取り組んでいる [Gibbs 94, Giora 03, Utsumi 99]。これらの研究では、字義的な解釈が優先される文と非字義的な解釈が優先される文の理解時間を比較したり、それらの文の後にいずれかの解釈に関係のある単語を提示

してその語彙判断の反応時間 (ブライミング効果) を比較するなどの実験が行われている。

これらの研究では、大きく分けて以下に示す 3 つの処理モデルが提案されている。

- 逐次処理モデル: 字義的な意味が最初に処理され、それが不適格な場合にのみ非字義的な意味が処理される。
- 直接処理モデル: 字義的な意味解釈の成否に関係なく、非字義的な意味が自動的に処理される。
- 段階的顕現性 (graded salience) モデル: 顕現性の高い意味が最初に処理され、それが不適格な場合にのみ顕現性の低い意味が処理される。

逐次処理モデルは前述した Grice の推意理論から直接得られるモデルであり、これに従うならば、非字義的な解釈に要する時間は字義的なものよりも必ず長いことになる。しかし非字義的な解釈に要する時間が字義的なものと同じか短くなるという、逐次処理モデルに反する実験結果 [Gibbs 94, Keysar 89] が多く得られており、直接処理モデルはこれらの結果をふまえて提案されたものである。しかし一方では、直接処理モデルに反する実験結果 [Blasko 93] も得られており、直接処理モデルも妥当とは言いがたい。

これらの結果に対して、最近提案されたのが段階的顕現性モデル [Giora 97, Giora 03] である。このモデルでは、字義的か非字義的かに関係なく、顕現的な (頻繁に用いられ、熟知されていたり、慣習的である) 意味が最初に処理されると主張する。このモデルの利点は、上述した多くの矛盾する実験結果を統一的に説明できる点にある。しかしながら、このモデルは言語理解の初期段階において顕現的な意味を処理する過程を対象としており、文脈による優先的な解釈とは別の過程であると主張している。よって推意導出のような文脈が影響する過程を説明することができないという問題点がある。

これらのモデルはすべての表現に共通する処理過程のモデルであるが、実際には言語理解の段階や非字義的な表現の種類によって異なる処理過程を経ると考えるのが最も妥当である [Utsumi 99]。例えばメタファーやイディオムでは、字義的な意味は顕現性や文脈の影響によって活性化したり、抑制されたり、活性化しなかったりする。しかし、アイロニーの解釈においては、少なくとも文意生成の段階までは字義的な意味が活性化されるはずである*7 (この詳細は 4 章で論じる。)

§ 2 言内の意味と言外の意味の意味的關係

再び発話 (1) を考えると、この発話の推意である「暖房をつけてほしい」という依頼行為と「部屋が寒い」という言内の意味の間には、後者が前者の動機である (部屋が寒いので暖房をつける) という意味的な関係が成立

*4 ここでの説明のように、関連性理論では語用論的推論として演繹しか用いていない。関連性理論研究者は推論メカニズムについてあまり関心がないようであるが、AI 研究者から見るとこの点は疑問である。

*5 さらに Sperber&Wilson は、Grice の考える語用論的推論は汎用目的のための推論メカニズムに従ったものであり、これではあまりにも推論することが多すぎるので語用論的推論として適切でなく、関連性に基づく言語理解のための専用の推論モジュールが存在するというのが妥当であると述べている。

*6 なお、コミュニケーションにおける語用論的推論と読心能力の関係について深く論じているものに [金沢 99] がある。

*7 なお、Sperber&Wilson は表意や推意の処理に順番はなく、あくまでも関連性の原則に従って並列処理されると述べている [Wilson forthcoming]。

している。また(7)では「会議に出席する」ことが「一緒に飲みに行く」という行為の障害になっているという関係がある。このように文の意味間を結び関係は一般に整合関係 (coherence relation) と呼ばれ、整合関係によって多くの表意と推意は関係付けられている [Green 92]。

同様の形式化は Searle の間接言語行為 (言内の意味が示す行為と言外の意味が示す行為が異なる発話) の扱い [Searle 79] にも見られる。Searle は、すべての間接言語行為について、意図した発話内行為 (言外の意味) の適切性条件 (felicity condition) のいずれかを陳述または質問する発話によって、それを間接的に遂行できると提案した。例えば、発話 (1) と同じ状況での以下の発話 (9) は「暖房をつけて」という依頼行為の準備条件 (相手がその行為をすることができる) を質問することによって、依頼行為を推意していることになる。

(9) 暖房をつけることができますか？

3.3 言外の意味のコミュニケーションはなぜ必要か

ここまで言外のコミュニケーションのメカニズムについて述べてきたが、その存在理由については説明しなかった。いったいなぜ直接言えることを言外の意味という誤解の生じやすいものを用いて間接的に伝えるのだろうか*8。

従来から語用論で言われてきたのは「そのほうが丁寧だから」という理由である。この丁寧さという概念はポライトネス (politeness) と呼ばれ、Brown & Levinson [Brown 87] によって体系化された。彼らのポライトネス理論では、社会のすべての構成員は、フェイス (面目) と呼ばれる自分が他人に対してどのように思われたいかという自己像を持っていると考える。フェイスには、他人に自由をじゃまされたくないという消極的フェイスと、他人によく思われたい・認めてほしいという積極的フェイスの2種類がある。しかし言語によるコミュニケーションでは、発話によって潜在的にフェイスを脅かす可能性がある。例えば、何かを依頼する発話は相手の消極的フェイスを脅かすし、相手を非難する発話はその人の積極的フェイスを傷つけることになる。発話によって引き起こされるこのような行為をフェイス威嚇行為 (face-threatening act; 以下、FTA) という。

社会的関係を維持するためには、何らかの方法で相手のフェイスを脅かす可能性を少しでも和らげることが望ましい。その方法のひとつとして彼らが挙げたのが、言外の意味を用いることである。例えば発話 (1) では、依頼という FTA を表に出さずに、より相手側に解釈が委ねられる推意という方法によって、相手のフェイスへの威嚇を軽減している。同様に、アイロニーを用いるのは、相手への非難をあからさまにしないことによって相手のフェイスを保つためである*9。また発話 (9) のように、FTA

を表に出しているが意図する行為を間接的に伝達する方法も、相手のフェイスへの威嚇を和らげている。

なお、FTA を遂行する際に必ずこのような方略を取るわけではない。社会的に強い立場の人が弱い立場の人に対して FTA を遂行する場合や、FTA を確実に遂行することがフェイスへの配慮より優先される場合 (例えば緊急時) には、FTA がそのまま遂行される。逆に、相手のフェイスをあまりにも傷つけてしまうので FTA を実行しないという選択もある。これらの方略のどれを選ぶべきかは、話し手と聞き手の社会的距離 (親密さ)、話し手が聞き手に対して持つ社会的権力、および当該文化における FTA の負担度の3つの要素によって決定される。

以上のように、ポライトネス理論では社会的関係を維持するための言語コミュニケーションに光が当てられている。しかしこの議論では (他の多くの言語論においても)、言内の意味がまずありきで、言外の意味はコミュニケーションの際の副次的な役割しか果たさないという発想が根底にある。しかし、本当にそうであろうか。社会的言語の議論をもう少し進めて、そもそもコミュニケーションにおいて言語がなぜ用いられるようになったのか、つまり人類における言語の起源について考えてみたい。

最近の言語の起源に関する多くの論考の中に、言語は社会的関係の維持のために誕生したという仮説がある [Dunbar 96]。言語が誕生する前の人類は、社会的集団内の個人間関係を良好に保つために肉体的接触 (猿の毛づくろいがこれに該当する) を行っていたが、危険に対処するために集団の規模が次第に大きくなるにつれて肉体的接触だけでは効率が悪くなってしまった (Dunbar によると、使える時間の30%を肉体的接触に費やすのが限界だそうである。) そこで肉体的接触を補うものとして声による接触、つまりことばを用いるようになったというのが Dunbar の仮説である。この仮説がそれほど突飛でないことは、いくつかの知見から窺える。例えば進化心理学では、認知システムにおける社会的知能 (協力、裏切り、かけひきなどの社会的なやりとりを用いられる知能) の重要性が言われている [Byrne 88]。また考古学的手法を用いて人の心の進化について論じた Mithen も、人類は初期の頃から社会的知能を有しており、最初期の言語は社会的相互作用に用いられたと論じている [Mithen 96]。

社会的言語仮説が正しいとすると、誕生時の言語の役割は情報伝達ではないことになる。さらに、社会的知能には他人の心を読む能力が必要であること、および前述したように、読心能力と語用論的推論能力、つまり言外のコミュニケーション能力との間の強い関係を考え合わせると、以下のような仮説を立てることができる。

- 言語によるコミュニケーションは、本来、推論にもとづく言外のコミュニケーションであり、言語的知

*8 厳密に言うと、すべての言外の意味が言内の意味として言い換え可能なわけではない。詩的なメタファーはその一例であり、このような表現はそれ自身が存在理由になる [内海 01]。

*9 アイロニーの心理学研究では、アイロニーが相手のフェイスへの威嚇を軽減する、つまりアイロニーによる非難が直接の表現よりも弱いかどうかは議論が分かれている [Colston 02a]。

能が進化するにつれて、言内の意味を用いた言語コミュニケーションも行われるようになった。言い換えれば、人類が言語を獲得した初期のころはコード化された明示的な言内の意味など存在せず、言語は相手の心を読むための刺激のひとつであったということである。よって、人間の言語コミュニケーションは、多くの動物の行うコード化されたコミュニケーション（例えば蜜蜂のダンス）とは生い立ちから異なるものである。この仮説からは、なぜ言外の意味が必要なのかという問題設定自体がおかしく、言語の本質は言外の意味にあることが帰結される。なお、この仮説は筆者の独自のものであり、これ以上の論拠はない。しかし言語の最も本質的な機能は詩的機能であると考えられるヤコブソンのように、言外の意味を第一に考えるこの仮説もあながち間違いではないと思う。

4. メタファーとアイロニー

本章では、非字義的な表現の代表的でかつ対照的な表現であるメタファーとアイロニーについて取り上げる。

(10) Oh, my love is a red, red rose.

(11) (待ち合わせの時間に遅れて来た友人に)
さすが時間に正確だね。

メタファーは、前出の (3) や上記の (10) のように、ある概念(被喩辞)をそれとは異なる別の概念(喩辞)でたとえることによって、被喩辞に対して話し手の抱く思考や感情を伝達する表現である。メタファーの意味は、喩辞や被喩辞の表す概念に関する知識を用いて、語彙アクセスや文意生成の過程で得られるので、メタファーの理解には特定の文脈や状況が必ずしも必要ではない。一方、(11) の例で明らかなように、アイロニーはある種の状況に対する話し手の態度を表明する表現であり、その理解は字義的な文意や状況から推意を導くという話し手の意味を解釈する過程に関わる。よって、アイロニカルな文意なるものは存在せず、特定の状況を考慮しなければアイロニーとして理解することは不可能である。

これらの表現が何を表象しているかに関しても違いが見られる。メタファーは人の思考を表象しているのに対し、アイロニーは人の思考の表象を表象するというメタ表象である。この違いは、前述したように心の理論の欠如が見られる自閉症者はメタファーを正しく理解できるがアイロニーは理解できない [Happé 93] ことや、アイロニーはメタ表象である分だけメタファーよりも理解時間がかかる [Colston 02b] といった知見から支持される。

4.1 メタファーによるコミュニケーション

メタファーによるコミュニケーションでは、メタファーの意味を導出する理解過程と、そこから詩的效果を喚起する鑑賞過程の両者が重要な役割を果たす [内海 01]。

メタファーはどのように理解されるか、またメタファー

とは何かについて多くの研究が行われている [Gibbs 94]。これらの中で、最近のメタファー研究の中心となっているのが、Lakoff の概念メタファー論 [Lakoff 80] である。概念メタファー論では、メタファーは人の心の中にある概念間の写像関係である概念メタファー (conceptual metaphor) がことばとして表出されたものであると考える。よって、例えば以下のメタファー (12) は、「旅」が持つ概念構造によって「愛」を表現する概念メタファー “LOVE IS A JOURNEY” の写像関係の一部をことばにしたものと説明される。

(12) Our relationship has hit a dead-end street.

概念メタファー論は、上記の例のような比較的慣習化されたメタファーには有効であるが、類似性を創造するようなメタファーへの適用には限界がある*10。

概念メタファー論と対峙するのが Glucksberg らが提案しているクラス包含論 [Glucksberg 01] である。この理論では、メタファーの喩辞概念を典型事例とするアドホックカテゴリが生成され、被喩辞概念がそのカテゴリのメンバであるとみなす(カテゴリの特徴が被喩辞概念に写像される)ことがメタファーの理解であると考えられる。例えば前述の (10) では、「バラ」から「美しい、愛らしい、冷淡な、無邪気な」といった特徴を持つアドホックカテゴリが生成され、「私の恋人」はそのカテゴリに属する概念であることが理解されると説明される。このようにクラス包含論は創造的なメタファーの説明には有効であるが、喩辞概念からどのようにアドホックカテゴリが生成されるかについては論じていない。

喩辞と被喩辞の類似度が低い詩的メタファーでは、喩辞や被喩辞では目立たないがメタファーの意味において顕現的になる特徴(これを創発特徴という)が理解に大きな影響を及ぼす [Nueckles 97]。創発特徴の生成過程のモデルとしては、内海 [Utsumi 98, 内海 02a] の情緒的類似に基づくメタファー理解モデルがある。このモデルでは異なる属性間に共通して存在する多次元構造をもとに被喩辞の持つ顕現的でない特徴と喩辞の顕現特徴の間の類似度を計算し、それに応じてメタファーの意味を特徴づける創発特徴を選択的に生成する。

一方、メタファーの鑑賞過程についてはあまり研究が進んでいないが、関連性理論では理解と鑑賞の両方を説明するメタファー論を展開している。関連性理論におけるメタファー理解の考え方は、クラス包含論と非常に類似している。つまり喩辞を拡充することにより得られるアドホック概念が表意を構成し、そこから得られる推意によってメタファーの意味が生成されるとする [Carston 02]。ここで、創造的なメタファーは慣習的なメタファーに比べて大きな処理労力が必要であり、それに見合うだ

*10 概念メタファー論に基づく詩的メタファーの分析 [Lakoff 89] も行われているが、その対象は概念メタファーを適用しやすいものに限定されている。概念メタファー論に対する批判については、[Glucksberg 01, Tsur 99] を参照のこと。

けの認知効果を得るために、数多くの弱い推意が導出される。この結果として生じるのが詩的效果であるというのが関連性理論におけるメタファーの鑑賞過程の説明である [Pilkington 00, Sperber 95] (一方、慣習的なメタファーでは処理労力がそれほどかからないので数少ない強い推意を得るだけで関連性が達成される。) この説明は、文学研究で言われている意図的なずれとしての異化 (defamiliarization) とその解消 [Miall 99] と深く関係しており、今後の展開が注目される。

4.2 アイロニーによるコミュニケーション

アイロニーが話し手の態度を表明する発話であることは、ほとんどのアイロニー研究者のコンセンサスが得られるであろう。しかしアイロニーは表現上の特徴に乏しいため、アイロニーの実体 (何をもちてアイロニーとするか) についてはさまざまな議論が行われている。

現在のアイロニー研究で主流となっているのは、アイロニーのメタ表象性に着目したアプローチと、アイロニーの不適切性に着目したアプローチである。前者の代表は関連性理論に基づくアイロニー論であり、アイロニーは他人の意見・考えや社会的通念などに類似した表象をエコーする (繰り返し述べる) ことによって話し手の否定的な態度を表明すると考える。例えば (11) の例では「約束の時間に遅れてはいけない」という通念と類似した表象「時間に正確である」をエコーして、非難の態度を表明している。よって、どのような表現がアイロニーとして用いられるかは、エコーの対象となる考えや通念とのくらい類似しているかによって決定される (関連性理論ではこれを解釈的類似と呼ぶ。) 一方、不適切性に基づくアプローチ [Attardo 00, 辻 01] では、アイロニーが発話された状況においてその発話が不適切であることがアイロニーの本質であると考えられる。上記の例では、待ち合わせに遅れた人に対して「時間に正確だね」と言うことは明らかに状況にそぐわない発話であり、これを意図的に行うことによって非難の態度が表明されることになる。しかしこれらのアプローチでは、すべてのアイロニー表現を説明しきれなかったり、アイロニーでない表現も含まれてしまうなどの問題点が存在する [Utsumi 00]。

実はこの2つのアイロニーの特徴は相反するものではない。さらに言うと、アイロニーである表現とアイロニーでない表現の境界は明確に決定できる性質のものではない。これらの考えをまとめて従来のアイロニー論の欠点を補ったものが暗黙的提示理論 [Utsumi 00] である。この理論を概略して述べると、アイロニーと解釈されるためには特定の状況設定 (話し手が何かを期待しているがそれが現実にはかなっておらず、それに対して否定的な態度を持つこと) が必要であり、その状況をことばを用いて暗黙的に提示する (話し手の期待をメタ表象によってほめかきつつ、不適切な表現を用いる) のがアイロニーであると考えられる。他人の意見や社会的通念ではなく、

必ず話し手の期待をほめかきと考えることによって、アイロニーにおける話し手の意図が明確になる。またアイロニーは状況の単なる提示であると考えられることによって、アイロニーの態度表明が婉曲的であり、場合によってはその非難の度合いが強まることが説明できる。さらにこの理論では提示の仕方に段階性を設けることによって、アイロニーという概念をプロトタイプ的に規定しており、これによって前述の問題点を解決している。

5. おわりに

もはや語用論は「言語学のくずかご」ではない。冒頭でも触れたように、本稿で論じてきた話題は、認知情報科学、言語心理学、社会科学などといった幅広い分野と連携しながら研究が進められている。今後はさらなる興味深い発展が期待される。

最後に、本稿を読んでこれらの話題に興味を持った読者がさらに詳細な内容を知るために読むべき文献を紹介しておく。語用論一般に関する解説書は多く出ているが、一昔前の (しかし現在でもその有益さは変わらない) 言語学の一分野としての語用論を知るためには、[Levinson 83, Thomas 95] がよい。本稿で述べたような学際領域としての最新の語用論を知るには、[小泉 01, 高原 02] がおすすめである。より社会や文化との関係を重視したものとしては [Mey 93] がある。なお本稿で述べられなかった言語行為論については、本レクチャーシリーズの第2回を参照されたい。また、最近の語用論は関連性理論なしで語るができないが、関連性理論は本レクチャーシリーズの第3回で予定している。また関連性理論の視点から語用論を論じたものとして [今井 01] があるし、最新の理論的動向をつかむには [東森 02] がよい。非字義的な表現に関する大書としては [Gibbs 94] が優れている。メタファーやアイロニーについては本稿で引用されている文献を読むことをお勧めするが、メタファーやアイロニーに関する筆者の論文 [内海 01, 内海 02a, 内海 02b] も参考にされたい。

◇ 参 考 文 献 ◇

- [Akmajian 01] Akmajian, A., Demers, R., Farmer, A., and Harnish, R.: *Linguistics: An Introduction to Language and Communication*, 5th Edition, MIT Press (2001)
- [Ariel 02] Ariel, M.: Introduction (Special issue: Literal, minimal and salient meanings), *Journal of Pragmatics*, Vol. 34, No. 4, pp. 345-348 (2002)
- [Attardo 00] Attardo, S.: Irony as relevant inappropriateness, *Journal of Pragmatics*, Vol. 32, No. 6, pp. 793-826 (2000)
- [Baron-Cohen 95] Baron-Cohen, S.: *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*, MIT Press (1995), 長野 敬, 長畑 正道, 今野 義孝 (訳): 自閉症とマインド・ブライントネス, 青土社 (1997)
- [Blasko 93] Blasko, D. and Connine, C.: Effects of familiarity and aptness on metaphor understanding, *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*,

- Vol. 19, No. 2, pp. 295–308 (1993)
- [Brown 87] Brown, P. and Levinson, S.: *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press (1987)
- [Byrne 88] Byrne, R. and Whiten, A. eds.: *Machiavellian Intelligence: Social Expertise and the Evolution of Intellect in Monkeys, Apes, and Humans*, Oxford University Press (1988)
- [Carston 02] Carston, R.: *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell Publishing (2002)
- [Colston 02a] Colston, H. L.: Contrast and assimilation in verbal irony, *Journal of Pragmatics*, Vol. 34, No. 2, pp. 111–142 (2002)
- [Colston 02b] Colston, H. and Gibbs, R.: Are irony and metaphor understood differently?, *Metaphor and Symbol*, Vol. 17, No. 1, pp. 57–80 (2002)
- [Dunbar 96] Dunbar, R.: *Grooming, Gossip and the Evolution of Language*, Faber & Faber (1996), 松浦 俊輔, 服部 清美 (訳): ことばの起源: 猿の毛づくろい, 人のゴシップ, 青土社 (1998).
- [Gibbs 94] Gibbs, R.: *The Poetics of Mind*, Cambridge University Press (1994)
- [Giora 97] Giora, R.: Understanding figurative and literal language: The graded salience hypothesis, *Cognitive Linguistics*, Vol. 8, No. 3, pp. 183–206 (1997)
- [Giora 03] Giora, R.: *On Our Mind: Salience, Context, and Figurative Language*, Oxford University Press (2003)
- [Glucksberg 01] Glucksberg, S.: *Understanding Figurative Language: From Metaphors to Idioms*, Oxford University Press (2001)
- [Green 92] Green, N. and Carberry, S.: Conversational implicatures in indirect replies, in *Proceedings of the 30th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics*, pp. 64–71 (1992)
- [Grice 89] Grice, H.: *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press (1989), 清塚 邦彦 (訳): 論理と会話, 勁草書房 (1998)
- [Happé 93] Happé, F.: Communicative competence and theory of mind in autism: A test of relevance theory, *Cognition*, Vol. 48, pp. 101–119 (1993)
- [東森 02] 東森 勲, 吉村 あき子: 関連性理論の新展開: 認知とコミュニケーション, 研究社 (2002)
- [今井 01] 今井 邦彦: 語用論への招待, 大修館書店 (2001)
- [金沢 99] 金沢 創: 他者の心は存在するか, 金子書房 (1999)
- [Keysar 89] Keysar, B.: On the functional equivalence of literal and metaphorical interpretations in discourse, *Journal of Memory and Language*, Vol. 28, pp. 375–385 (1989)
- [小泉 90] 小泉 保: 言外の言語学: 日本語語用論, 三省堂 (1990)
- [小泉 01] 小泉 保 (編): 入門 語用論研究 — 理論と応用 —, 研究社 (2001)
- [Lakoff 80] Lakoff, G. and Johnson, M.: *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press (1980), 渡辺 昇一, 楠瀬 淳三, 下谷 和幸 (訳): レトリックと人生, 大修館書店 (1986)
- [Lakoff 89] Lakoff, G. and Turner, M.: *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*, The University of Chicago Press (1989), 大堀 俊夫 (訳): 詩と認知, 紀伊国屋書店 (1994)
- [Levinson 83] Levinson, S.: *Pragmatics*, Cambridge University Press (1983), 安井 稔, 奥田 夏子 (訳): 英語語用論, 研究社出版 (1990)
- [Levinson 00] Levinson, S.: *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, The MIT Press (2000)
- [Mey 93] Mey, J.: *Pragmatics: An Introduction*, Blackwell Publishers (1993), 澤田 治美, 高司 正夫 (訳): ことばは世界とどうかかわるか 語用論入門, ひつじ書房 (1996).
- [Miall 99] Miall, D. and Kuiken, D.: What is literariness? Three components of literary reading, *Discourse Processes*, Vol. 28, No. 2, pp. 121–138 (1999)
- [Mithen 96] Mithen, S.: *The Prehistory of the Mind: A Search for the Origins of Art, Religion and Science*, London: Thames and Hudson Ltd. (1996), 松浦 俊輔, 牧野 美佐緒 (訳): 心の先史時代, 青土社 (1998)
- [Nueckles 97] Nueckles, M. and Janetzk, D.: The role of semantic similarity in the comprehension of metaphor, in *Proceedings of the 19th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp. 578–583 (1997)
- [Pilkington 00] Pilkington, A.: *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*, John Benjamins Publishing Company (2000)
- [Searle 79] Searle, J.: *Expression and Meaning*, Cambridge University Press (1979)
- [Sperber 95] Sperber, D. and Wilson, D.: *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*, Oxford, Basil Blackwell (1995), 内田 聖二, 中遠 俊明, 宋 南先, 田中 圭子 (訳): 関連性理論 — 伝達と認知 —, 研究社出版 (2000)
- [Sperber 02] Sperber, D. and Wilson, D.: Pragmatics, modularity and mindreading, *Mind & Language*, Vol. 17, No. 1/2, pp. 3–23 (2002)
- [高原 02] 高原 脩, 林 宅男, 林 礼子: プラグマティクスの展開, 勁草書房 (2002)
- [Thomas 95] Thomas, J.: *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*, Longman (1995), 浅羽 亮一, 田中 典子, 津留崎 毅, 鶴田 庸子, 成瀬 真理 (訳): 語用論入門 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味, 研究社出版 (1998)
- [辻 01] 辻 大介: ココロの語法 アイロニー・ユーモア・諷刺を中心に, *言語*, Vol. 30, No. 7, pp. 54–60 (2001)
- [Tsur 99] Tsur, R.: Lakoff's roads not taken, *Pragmatics & Cognition*, Vol. 7, No. 2, pp. 339–359 (1999)
- [Utsumi 98] Utsumi, A., Hori, K., and Ohsuga, S.: An affective-similarity-based method for comprehending attributional metaphors, *Journal of Natural Language Processing*, Vol. 5, No. 3, pp. 3–32 (1998)
- [Utsumi 99] Utsumi, A.: Explaining the time-course of literal and nonliteral comprehension, in *Proceedings of the Second International Conference on Cognitive Science (ICCS/JCSS99)*, pp. 771–774 (1999)
- [Utsumi 00] Utsumi, A.: Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony, *Journal of Pragmatics*, Vol. 32, No. 12, pp. 1777–1806 (2000)
- [内海 01] 内海 彰: レトリックの認知・計算モデル: 隠喩とアイロニー, *認知科学*, Vol. 8, No. 4, pp. 352–359 (2001)
- [内海 02a] 内海 彰: コンピュータによるメタファー理解, *言語*, Vol. 31, No. 8, pp. 58–64 (2002)
- [内海 02b] 内海 彰: 比喩の認知 / 計算モデル, 別冊・数理学 02.10 月号「脳情報数理学の発展」, pp. 103–109 (2002)
- [Wilson forthcoming] Wilson, D. and Sperber, D.: Relevance theory, in Horn, L. and Ward, G. eds., *Handbook of Pragmatics*, Oxford, Basil Blackwell, forthcoming.

[担当委員: × ×]

19YY 年 MM 月 DD 日 受理

著者紹介

内海 彰 (正会員)

1993 年東京大学大学院工学系研究科情報工学専攻博士課程修了。博士(工学)。東京工業大学大学院総合理工学研究科助手, 講師を経て, 2000 年から電気通信大学電気通信学部システム工学科助教授。本稿で紹介した内容を中心に, 言語やその周辺を対象とした認知や計算に関する研究に従事。日本認知科学会, 情報処理学会, 言語処理学会, 日本語用論学会, Cognitive Science Society, ACL, AAAI 等各会員。